

国文学科の十五年——今井先生との思い出——

都築久義

今井文男先生に初めてお会いしたのは、本学が創立される二年くらい前だったと思う。今は亡き西田正好先生と一緒に、金城学院大学の研究室にお訪ねした。白髪で風格があつて、いかにも学者然とした風貌は今でも強く印象に残っている。当時、西田先生は愛知淑徳短期大学にあつて、四年制大学の創設に奔走され、国文学科の開設責任者だった。今井先生を文学部長に迎えることが内定していたので、わたしを紹介して下さったのである。

わたしは定時制高校に勤務していたが、非常勤講師として金城学院大学にも通い、西田先生には大学の同窓のよしみもあつて、はやくから目をかけてもらつていた。そのご縁で愛知淑徳大学の創設の際には、国文学科の末席に名を連らねさせていただいた。そしてわたしの方が一足先に、短期大学に移ると、前にもまして今井先生の研究室にお

じゃまするようになった。西田流に言えばごきげんとりうかがつたわけである。

実をいうとわたしはそれまで今井先生のご高名を知らず、先生の学問的業績や活動に無知であつたが、先生が表現学の理論を樹立され、表現学会を組織されたことを聞いて心から敬服した。わたしもさっそく入会し、例会にも顔を出してみたものの、結局は不勉強で身につかなかつた。しかし、一つの学会を組織して、全国的な規模にまで発展させ、しかもそれを長年にわたつて維持してこられた先生の指導力には、今も頭が下がる思いがする。

それはともかく、昭和五十年四月、いよいよ愛知淑徳大学は開学した。開学当初の国文学科の専任教員は、今井先生と西田先生とわたしの三人。今井先生が「近世」、西田先生が「中世」、わたしは一般教育の「文学」を担当した。

国語学も一年に配置してあったけれども、担当の平井昌夫先生は鎌倉から隔週に來られた。現在のカリキュラムも一年に、「近世」や「中世」があるのは、この時のままだからである。

開学初年度の国文学科のことで思い出されるのは、伊賀上野への文学散歩。参加者は一年生だけで少なかったので電車で出かけた。むろんわたしも同行した。芭蕉がご専門の今井先生の案内で、市内を歩きまわったのだが、西田先生もわたしも途中ですっきりバテてしまった。ところが一番年長の今井先生は、若い学生の先頭に立って健脚ぶりを発揮されていたのにはびっくりした。さすがに戦中派はちがうと、感心したものである。

二年目から近藤一一先生が就任され、三年目からは渡辺竹二郎、沢田正熙、阿部金正の各先生が赴任されて国文学科の顔ぶれがそろった。が、国文学科を中心に運営していたのは今井・近藤・西田の三先生にわたしを加えた四人であった。この四人で最初の卒業生の卒論を分担指導した。卒論といえば、卒論をハードカバーで製本し、学校に残しておくことを提案されたのは、たしか今井先生であったと思う。

国文学科の四人体制は昭和五十五年まで続いたが、この年の三月、国文学科はもとより大学にとっても衝撃的な事

が起こった。西田正好先生が四十八歳の若さで急逝されたのである。この時の今井先生のショックと哀しみはいかばかりであったか、察するにあまりある。すぐさま西田先生の追悼録が刊行されたが、今井先生は「追悼」の八首を寄せ、最初に次の句を詠まれた。

脳天を襲撃凍てる訃音楽

そういえば生前の西田先生が「今井さんはやはり学校の先生だ！」といて、いつも苦笑しておられたが、今井先生のことと忘れてならないのは、通学バスの運転手への挨拶の励行がある。先生は新入生のガイダンスで、通学バスの運転手に、「お願いします」と、「ありがとうございます」として長く受け継がれてきたが、最近はバスに乗ってもあまり聞かなくなつたようだ。

これはわたしにかかわる個人的なことであるが、いつ頃の事であったか、学生が軽薄なテレビ番組に出演したのを注意されたことがあつた。ところが注意された学生に、「先生だつて出てるじゃん！」と言われ、今井先生が返答に窮されたそうである。学生の言う先生とはわたしのことで、知人のディレクターに頼まれ、「面白い大学教授」とかの触込みで出演したことがあり、わたしは今だに恐縮している。

こうして十五年を振り返ってみると、今井先生の思い出も公私さまざまつきないが、国文学科の陣容も一変し、こんど今井先生が去られると創立メンバーはわたし一人になる。今井先生や西田先生が築かれた国文学科の方針や体制は一つひとつ消えて行く。時代が移り人がかわればそれが当然だとしても、一抹の寂しさを禁じ得ないのは、おそらく今井先生とて同じであろう。ともあれ今井先生、ほんとうにご苦勞さまでした。